

2 落語を用いたコミュニケーション能力向上へのとりくみ

学院 言語聴覚学科 下嶋哲也 坂田善政 小野久里子 北義子

【目的】当学科では、従前より演劇的手法をもちいたコミュニケーションへの気づきを促す演習科目（2年次前期）や、紙芝居の実演を通してコミュニケーションの場を体験する演習科目（1年次後期）など、言語聴覚士の基本的な資質を高めるための取り組みを拡充してきた。今年度より、2年次のさらなる拡充として、コミュニケーション能力の向上を目的として、落語を用いた演習科目を考案・導入したので、その取り組みについて報告する。

【方法】対象：学科2年次に在籍する学生25名 期間：4月～5月の48日間 教材：三遊亭遊馬のこども落語（CDおよびテキスト） 手続き：4月に初回オリエンテーションのための講義を行い、発話の分析に関する視点、トレーニング方法などについて説明したうえで、落語のテキストを配布した。それ以降は、個人練習とグループ練習を2本立てで行った。個人練習では、各自自主プログラムを施行し記録した。個人練習の録音データを教官に提出した場合には、可能な範囲でフィードバックした。グループ練習は原則週1回行い、配役を交替しながら数名で落語の練習を行った。練習ポイントは、コミュニケーションの「間」と「情緒的表現」であった。グループ練習は初回のみ録音し、CDに収めて外部講師（ボイストレーニング専門）に送付した。個人・グループの訓練記録は、最終的に教官に提出させた。練習期間終了日にグループ対抗のコンペ形式で発表会を行った。発表会には外部講師が同席し、後でコメントと助言を受けた。発表会後に演習科目の効果について、効果の有無については6件法、効果の感じられた領域を5つに分けたアンケートで調査した。

【結果および考察】効果（下図1）については、「だいぶある」「多少ある」を合わせると77.5%となり、学生の多くが効果を感じていた。一方、「殆どない」「わからない」を合わせると12%となり効果が感じられなかった者もいた。効果が感じられた領域（下図2）として、最も意見の多かった領域は「発声」で34.1%、次は「コミュニケーション」「表現力」で22.7%であり、対人コミュニケーションの基礎的な能力に効果を感じていたものと思われた。2つの結果から、落語を用いた取り組みは、コミュニケーションの素養向上にとって、学生本人から見て一定の効果があったと思われた。今後さらに効果的な練習方法を模索する必要がある。

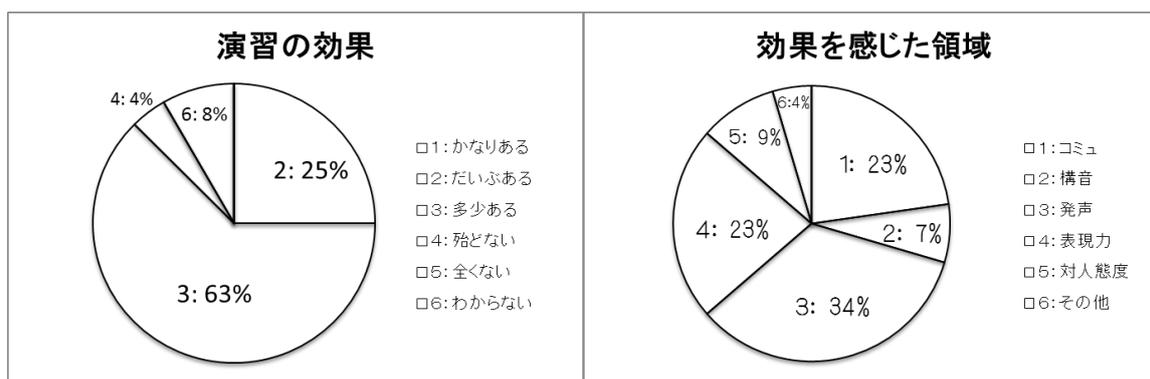


図 1

図 2